

東京外国語大学ITP-AA 2010 年度派遣報告書

氏名	テーイプジャン ユスブ	所属	大学院総合国際学研究科 国際社会専攻 後期課程 1 年		
派遣 先1	ミーマール・スイナン芸 術大学(トルコ)	期 間	2010. 05.06－2011.01. 31	教 授	Prof.Dr.Abdullah Uçman
派遣 先2	ライデン大学(オラン ダ)	期 間	2011. 02.01－2011.03. 30	教 授	Prof.Dr.Erik.J.Zürcher
テーマ	タンズィマート期におけるオスマン・ジャーナリズムについて				
指導 教員	新井政美				

I 研究の概要

はじめに

オスマン帝国の近代化運動である「タンズィマート(*Tanzimât*,1839-76)」の舞台となった 19 世紀における政治・軍事・経済・文学・文化といったあらゆる社会変容を探る研究が増える中、政府古文書と別に当時発行されていた定期刊行物も重要な史料となりつつある。こうした定期刊行物利用は、当然ながらオスマン帝国のジャーナリズム研究誕生につながった。その中で、1876 年の立憲政の樹立や議会招集などの政治改革、そして、戯曲、小説シリーズなどの文学作品が誕生といったトルコ文学の根本的変容をもたらした新オスマン人と呼ばれる知識人たちが当時創刊した定期刊行物が注目されるようになってきた。

このように、オスマン帝国の近代化過程において数多くの側面で伝統を打破し、オスマン社会に変革をもたらした新オスマン人たちの功績の一つは、新聞ジャーナリズムを展開し、世論の出現に啓蒙的役割を果たしたことにあると言える。しかし、当時のオスマン人の読み書き能力の問題や、それゆえに、個人の思想や感情を表すノートやメモなどの史料が不足していることが原因で今日まで、新オスマン人のジャーナリズム活動と世論の相互関係についての研究はあまり進んでいなかった。

そこで、本研究では、新オスマン人が 1860 年から 1867 年の間にイスタンブルで発行した新聞・雑誌を取り上げ、ジャーナリズムの誕生と近代化の過程におけるその位置、および新オスマン人の言論活動を中心に検討し、トルコにおける世論形成の始まりを探りたい。

まず、いくつかの概念を確認しておこう。

オスマン帝国の近代化運動である「タンズィマート」とは、1839 年に発布されたギュルハーネ改革勅令の後、官僚主導により行われた政府の機構、立法・司法、地方行政、税制および教育など諸改革の総称である。この改革は、1876 年に発布された「ミドハト憲法」とその直後に召集された議会という成果を生み出して、一応終止符が打たれたと見なされる。

ところが新オスマン人とは、このような官僚主導の改革を批判し、専制政治から立憲政治へ移

行することや議会を求めていた官僚で、その主張を新聞・雑誌などにおいて言葉により表現した、それなりに「世論」の形成に影響を与えた知識人ジャーナリストである。

つぎは、オスマン・ジャーナリズムについてみてみよう。ここでいうジャーナリズムとは、新聞ジャーナリズムであることに注目してもらいたい。「タンズィマート」以前もオスマン帝国においては既にオスマン・トルコ語で発行される新聞が創刊されていたものの、本格的な新聞活動が盛んになったのは1860年代後半に上記の新オスマン人達が登場してからのことである。概略すると、皇帝スルタン・マフムート2世(1785-1839、在位1808-39)の時代に、改革の一環として、そして中央集権を再確立するための手段の一つとして官報(1831年に創刊)が導入されたが、スルタン・アブデュルメジト(在位:1839-61)の時代を経てスルタン・アブデュルアズィズ(在位:1861-76)の時代になると、改革の指導者により少数独裁政治が出現していた。そして官報の創刊から35年後、その政治に強く反対する新オスマン人によって国内において批判的言論活動が展開される中で、新オスマン人達が「道具」として扱い、「副産物」の性格をもった民間紙が誕生した。1867年以降、批判的言論活動の中心地はヨーロッパに移ったが、こうした民間紙によって、世論が形成されるに伴い、その「道具」は徐々に「副産物」から独立の「産物」へと変身していった。つまり、新オスマン人により、オスマン帝国におけるオスマン・トルコ語のジャーナリズムが誕生したのである。

先行研究

新オスマン人の出版活動と当時の世論形成についての研究はほとんどないが、ここで、新オスマン人についての研究をいくつかを紹介したい。

新オスマン人に関してなされてきた研究は、一般的に言えば、政治思想史や出版史、あるいはトルコ文学史、いずれかの立場で行われるのが主流だった。例えば、政治思想史の観点においては、新オスマン人達の政治思想に関する総合的研究と個別研究を行なったシェリフ・マルディン(Şerif Mardin)の著書がある[Mardin 1962]。出版史の観点としてフアト・スレヤ・オラル(Fuat Süreyya Oral)の研究[Oral 1968a]とジャヴィト・オルハン・テュテンギル(Cavit Orhan Tütengil)の著書が挙げられる[Tütengil 1985]。文学の立場からは、タンズィマート時代において活躍した新オスマン人達の経歴をまとめ、タンズィマート文学作品と当時の社会関係、そしてその作品が新聞においていかに発展してきたかを研究の一部としたアフメット・ハムディ・タンピナル(Ahmed Hamdi Tanpınar)の独特な研究がある[Tanpınar 1956]。

一方、新オスマン人の出版活動に関する総合研究として、新オスマン人の思想と彼らの出版活動との関係を探ったエディベ・ソゼン(Edibe Sözen)の論文がある[Sözen 1992]。E.ソゼンは「新オスマン人」のうち代表的な3名を取り上げ、相互の間に、政治思想的には分裂があったものの、結局各種の新聞を創刊することによって新オスマン人達は自分達の思想を現実に効果があるものとして発展させたと分析している。

日本では、石丸由美氏によるオスマン帝国のジャーナリズムに関する研究がある[石丸 1991]。同研究は1831年から1908年までのオスマン帝国における出版事業を概観したものであり、注目

されている点はやはりシナーシなどタンズィマート時代の知識人達がジャーナリズムを展開し、オスマン・トルコ語の簡略化によって民衆の知的レベルを高めようとしたことにあった。いずれの注目点から見ても新オスマン人の出版活動がいかに重要であるかがわかる。

研究目的

本研究では、新オスマン人が 1860 年から 1867 年までにイスタンブルで創刊したいくつの新聞・雑誌を取り上げ、それらに記載されていた議論を検討することで、オスマン帝国における世論の形成について考える。

研究方法

研究の方法としては、1860 年から 1867 年までに創刊された新聞・雑誌を一つ一つ分析し、それぞれが共有する世論の形成の特徴を探す。最後に、この時代における世論形成の全体像を描くことにする。

II 派遣成果

今回の派遣の目的は、大きく分けると 2 つあった。一つは、派遣先 1 において本研究に必要な新聞・定期刊行物など史料を集めることであり、派遣期間中に、1860 年から 1867 年にイスタンブルで創刊された民間の新聞・定期刊行物合わせて 9 件のデジタル版を収集することができた。集めた定期刊行物のうち 2 件について解説を行い、メモを作成した。また、オスマン帝国の近代化、トルコ・ジャーナリズム、文学、思想史などの研究に必要な分野において出版された書籍 50 冊ほど購入した。また数多くの論文をコピーし、日本に持ち帰った。

No	紙/誌名	創刊日付
1	Tercüman-ı Ahval	1860.10.21 (6 Rebiulahir 1277)
2	Tasvir-i Efkâr	1862.06.27 (30 Zilhicce 1278)
3	Mecmua-i Fünun	1862.06-1862.07 (Muharrem 1279)
4	Mecmua-i İber-i İntibah	1862.12-1863.01 (Recep 1279)
5	Mir'at	1863.02.19 (1 Ramazan 1279)
6	Muhbir	1867.01.01 (25 Şaban 1283)
7	Ayine-i Vatan	1867.01.14 (8 Ramazan 1283)
8	Vatan	1867.04.21 (17 Zilkade 1283)
9	Utarit	1867.05.14 (10 Muharram 1284)

派遣先 1 において得た成果の補足として次の 2 点を紹介したい。一つは、トルコおよびオスマン帝国の社会に対して関心を持つようになってから 10 年近くになったにも関わらず、トルコを一

度も訪れたことがなかったことについて、常に、残念に思ってきたが、今回の派遣を通じて、オスマン帝国のたくさんの遺産や文化を受け継いだトルコ社会を観察することができ、頭でイメージしていた社会が具体化した。ただし、頭の中で明確になったトルコのイメージは決して良い面だけではなかった。

もう一つは、本研究を効率よく行うための基本であるオスマン・トルコ語能力を一層高めることであった。昨年 10 月下旬から今年 1 月下旬まで、イスタンブルの科学・芸術協会が開催した 13 回目のオスマン・トルコ語ゼミに出席し、速記体のオスマン・トルコ語も読めるようになった。

派遣先 2 においては、更に研究に必要な史料を収集すると同時に、派遣先の指導教員の Erik.J.Zurcher 教授と論文に関する仮設問題点と本研究の意義について議論を行い、コメントを頂いた。また、同教授から、筆者が持っている関心点を明らかにするため、新聞・定期刊行物以外に、更に古文書など一次史料が必要であることと、改めて近代化の視点から定期新聞・定期刊行物研究を行うことの有効性についてもアドバイスを頂いた。

III 今後の課題

今後は、まず本学指導教員のもとで博士論文のテーマを決め、派遣中に収集してきた新聞・定期刊行物を解説・分析し、問題点を明らかにしたい。

そして、ライデン大学に派遣中、CAAS 担当の Busser 教授より「ライデン大学において英語で博士試問を受けることによって、ライデン大学の学位も取得できるので、外大と相談して、そういう希望がある場合、是非私に連絡ください。」とアドバイスを頂いた。従って、今後は日本語の論文と同時に英語でも論文を発表できるように、切磋琢磨してゆきたい。

IV 参考文献

- Mardin,Şerif. 1962: *The Genesis of Young Ottoman Thought*, Princeton: Princeton University Press.
- Oral, Fuat Süreyya. 1968: *Türk Basın Tarihi:Osmanlı İmparatorluğu Dönemi 1728-1922*, Ankara: Yeni Adım Matbaası.
- Sözen,Edibe.1992: “Yeni Osmanlılar ve Gazetecilik”. *İstanbul Üniversitesi İletişim Fakültesi Dergisi*, pp.177-186
- Tanpınar,A.Hamdi. 2008 [1956] : *19.Asır Türk Edebiyatı Tarihi*.İstanbul: Yapı Kredi Yayınları. 3.Baskı.
- Tütengil,Cavit Orhan.1985: *Yeni Osmanlılar'dan Bu Yana İngiltere'de Türk Gazeteciliği*.İstanbul: Belge Yayınlar.
- 石丸由美 1991 「オスマン帝国ジャーナリズム事情 (1831-1908)」『オリエント』34 卷 2 号,日本オリエント学会,110-124 頁。